
勇者物語

モノクロ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

勇者物語

【Nコード】

N3886BA

【作者名】

モノクロ

【あらすじ】

現実世界から異世界に魔王討伐のための勇者として召喚されてしまった普通の男の物語である。

処女作なので変な部分もあるかもしれませんがご注意ください。
徐々に文章量を増やしていきます。

勇者物語？（前書き）

少しずつ書いていくので短いです。

勇者物語？

「おはよう、母さん」

俺の1日は、何時もこうやって始まる。

「おはよう、ユウ。早くご飯たべなさい、学校に遅れるわよ」

「はいはい。毎日毎日同じこと言わなくてもわかってるって」

これまでも毎日同じようなことを繰り返し、これからも繰り返されると俺は漠然と考えていた。

しかし、そんなことはなかった。

「ごちそうさま、母さんそれじゃあ学校いってくるよ」

「いつてらっしゃい、忘れ物してない？」

「してないよ、じゃいつてきます。」

そう、まさかドアを開けたら、光の塊のようなものに包まれるなんて想像すらしていない。

勇者物語？（後書き）

駄文にお付き合いいただきありがとうございます。

勇者物語？（前書き）

2話です。

前回より文章が増えています。

勇者物語？

光の塊が消えると周囲の光景は自分が見知ったものではなく、周囲には映画で見たことがある、【騎士甲冑を来た人たち】、【黒いフードを纏っている魔法使いのような人たち】、が自分を取り囲み正面には、騎士甲冑を来た人を左右に従え右手に【光輝く剣】を持ち金の髪に髪と同色の髭を生やし豪華絢爛な装飾を施した服を着た【王のような人】がいた。

「ここはどこですか？」

「ようこそ勇者よ、我が城へ」

「ゆ、勇者？だ誰がですか」

「それはお主のことだ。お主は魔王討伐するための勇者としてこの聖剣に選ばれここに召喚されたのだ」

【王のような人】が右手に持っていた【光輝く剣】を掲げた。

は？勇者？魔王討伐？聖剣？召喚？

意味がわからない、いや意味はわかるが理解したくないっ

「俺はただの高校生だ！勇者や魔王討伐ってどういうことだよ！？それに召喚されたって俺は家に帰れるのか！！説明しろよ！！」

「貴様っ！王に向かいそのような口を利いてもよいと思っているのか！！不敬であるぞ！！」

【王のような人】の右に立っていた人が叫んだ

「良い、フェルム騎士団長。勇者は召喚されたばかりで戸惑っているのだろっ、勇者よお主の疑問は魔術師リルナに問うが良い」

「魔術師リルナ？」

「うむ、リルナは我が国でも屈指の实力者お主の疑問に全て答えてくれるだろう。話の続きはお主の身に起こったことを理解してからにしよう」【魔術師リルナ】その人なら何が起きているか教えてくれるのか？

「その人は何処にいるん……」

その時、ゾクツと寒気を感じた。

騎士団長と呼ばれた女性が俺を睨んでいた。

「…ですか？」

「フェルム騎士団長に案内させよう、フェルム騎士団長構わぬな」

「了解しました。では勇者ついてこい」

そして、俺の前までやって来た。離れていたから解らなかったが、フェルム騎士団長と呼ばれた女性はとても綺麗だった。肩口で揃えられた銀色の髪に勝ち気な深緑の瞳その瞳に見られ、俺は見惚れていた

「何をしている、置いていくぞ」

「あ、ああかった」

「では、勇者を魔術師の元まで案内して参ります。」

王がいた場所を出て騎士団長と共に歩き出した。騎士団長は俺のこ
とを歩きながら見ていた。

「なんだよ」

「貴様のような剣を握ったこともないような者が勇者に選ばれるな
ど理解出来ぬと思ったただけだ」

「何で俺のこと何にも知らないのに剣を握ったことがないって解る
んだよ」

「貴様の立ち振舞いを見ればわかる…貴様のような存在がなぜレン
ティスに選ばれたのか理解できぬな」

「レンティスって何だよ？」

「気になるならリルナに聞け、もうついたぞ」

「えっ」

気付けば目の前に木製の扉があった。

「リルナはこの中にいる中に入り貴様の疑問を問うがいい」

「フェルムは入らないのかよ？」

名を呼んだ瞬間、首に剣を突きつけられた。

「な、なんだよ」

「ほっ、剣を突きつけられて腰を抜かさぬか、大抵の奴なら腰を抜

かすか悲鳴をあげるものを、どうやら見込みはあるようだな」

「は？」

「一度しか言わぬからよく聞け我が名を呼んで良いのは私が認めた者のみだ。私の名を呼びたくば私に認めさせるのだな貴様のことを」

「わかったよ、あと俺の名前は貴様じゃなく「貴様の名に興味はない私に呼んでほしくば私に認めさせることだ」

「わかった。それで騎士団長は入らないのか？」「私は魔術師とい

う奴らが好かん、力があるのは認めるが正々堂々と戦わぬからな」

「そうか、じゃあどうするんだ？」

「話が終わるまでここで待っている、早くいけ」そして俺は木製の扉を開けた。

勇者物語？（後書き）

駄文にお付き合いいただきありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3886ba/>

勇者物語

2012年1月10日21時53分発行